

いつから魔力がないと錯覚していた!?

4

サファイラス・
ペルフェクティオ

魔法の名門家に生まれたが
『魔力なし』と虐げられてきた薄幸の美少年。
伝説の魔法使いだった前世を思い出してからは
可哀想な自分と決別し、自由な人生を満喫中！

パーシヴァル・
ペリサリオ

ヴァンダーウォール辺境伯家の三男。
幼い頃から騎士を目指している真面目な優等生。
サファイラスの初めての友達で、
トラブルに巻き込まれがちな彼を心配している。

ケット・シー

幻獣界から
サファイラスが召喚した
妖精猫。

アウローラ

サファイラスの後援を務める
ブルームフィールド公爵家の一人娘。
優れた力を持つ聖魔法使い。

クラウイス

獣人の国・ワーズティターズ王国の王太子。
内乱が落ち着いて、学院に戻ってきた。

デイラン

パーシヴァルの父方の従兄弟。
学院内の剣術大会で
毎年優勝している実力者。

フラヴィア

パーシヴァルの母方の従姉妹。
自称・パーシヴァルの婚約者。

ペリサリオ家の人々

オースティン……ヴァンダーウォール卿。パーシヴァルの父。
アデライン夫人……パーシヴァルの母。
サファイラスをいたく気に入っている。
テオドール……長兄。婚約者のサンドリオンは白魔法使い。
カーティス……次兄。クリステラという婚約者がいる。

目次

いつから魔力がないと錯覚していた!? 4

7

番外編 俺が運命の人だって？

それは違います！

283

いつから魔力がないと錯覚していた!?

4

プロローグ

「サフィラスは席で待っていてくれ」

「うん」

パーシヴァルがカウンターにお茶とお菓子を取りに行ってくれたので、俺は席の確保に向かう。午後のカフェテリアは、案外学生が多い。お茶を飲みながら歓談したり、友人同士で試験勉強したり。

なんかこういう風景って学生らしくていいよな。入学したばかりの頃、俺は孤立していたから、それどころじゃなかった。それが今では、こうやって放課後一緒に過ごす友人がいる。俺もようやく学生らしい生活を送っているってわけだ。

それどころじゃないと言えば、ここ最近には本当に色々なことがあったな。俺の場合、その色々の規模が一介の学生が扱う問題のレベルじゃなさすぎなんだよ。

このクレアーレ学院に入学して実家と縁切りしてから、公爵令嬢と自国の王子の婚約破棄に始まって、俺自身の誘拐騒動に、ワーズティタースの内乱と、立て続けに事件が起きている。

そしてこの間の、ヴァンダーウォールの魔獣大発生だ。

そうそう、その前に、まるで予兆のように王都でも魔獣が湧いて出ていたな。

その時にたまたま資金が必要だった俺が、魔獣の素材を手に入れるべく、めちゃくちゃ狩りまくってからまもなくの、ヴァンダーウォールでの事件だった。

ヴァンダーウォールの森から湧き出た魔獣の数は、王都で発生した数の比ではなく、実に深刻な事態となっていた……んだけどね。

当然、大切な友の故郷であり、俺の第二の故郷でもある地が危機的状况にあるというのに、黙って何もしない俺ではない。

すぐにパーシヴァルと一緒にヴァンダーウォールに向かい、極大魔法を使って一日で森から溢れた魔獣を殲滅した。正直なところ、魔獣を狩るよりその後の方がずっと大変だった。

倒した大量の魔獣の処理に、魔獣に襲撃されて壊滅状態となった村や集落の復興支援。

俺は便利な魔法が無限に使えるので、パーシヴァルに認められたヴァンダーウォールの盟友として恥じないよう、できることはなんでもやったりつもり。それが少しでも、ヴァンダーウォール立て直しの力になっていれば嬉しい。

もちろんこれからだって、何かあればすぐに駆けつけるよ。家族から虐げられていたサフィラスを受け入れてくれた、ヴァンダーウォールとベリサリオ家の皆さんが大好きだからさ。

だけど、人々に被害がないように、常に魔獣を討伐している王都と、国の守りの要であるヴァンダーウォールでこんな異変が起きるなんて……何かあるって思うのが普通だよな。

王都の森の深淵で見つかった竜の鱗と、捕まえた怪しい謎の男。

今回の騒動に、何かしら関係があるんだろうとは思うけど。その後どうなったのか、俺の耳には入ってこない。きつと、試験間近の俺に気を遣っているんだろうな。

だって聞いちゃったら、その内容によってはいたってもいられないに決まっている。

ともあれ、これだけ色々起きていれば、退屈しているらしい女神も、今頃は手を叩いて喜んでいることだろう。

空いているテーブルを確保した俺は、図書館から借りてきた神話の本を開く。

——太古の昔。俺たちが住んでいるこの世界には、女神の子供たちが暮らしていた。

女神に等しい豊かな魔力と魔法で、高度な文化を持ち高等な魔法具を作り、争いなど知らず平和に暮らしていた女神の子供たちは、しかし、緩やかに世界からその姿を消した。

穏やかで豊かな暮らしを営み、繁栄を約束されていたはずの彼らは、満たされすぎたが故に、自分たちが滅びてゆくことすらなんとも思わなかったのかもしれない。そして、女神も自分の子供たちが消えてゆく様子を、ただ眺めていただけだったんだろう。

女神は娯楽を求めこそすれ、人々の営みに介入はしない。代わりに、俺のような奴を世界に放り込んで、そこに起こる小さな波紋を楽しんでいるようだ。

ただ眺めているだけなんて、一体何が楽しいのかわからないが、そもそも神の考えが人如きに理解できるわけがない。

大陸のあちこちには、女神の子供たちの遺跡が残されている。俺たちには扱えない魔法具や難解な仕掛けが施された遺跡は、女神の叡智えいちなくしては決して造れない。多くの冒険者はその女神の恩

恵を手に入れようと遺跡に潜るわけだけど、こいつを攻略するのは至難の業だ。

何しろ、遺跡は人智を超えたもの。生ける死者のような、俺たちの常識では考えられない怪物がそこかしこに潜んでいたり、迷ったら二度と出られない迷宮があったりと、とにかくありとあらゆる困難が詰まっているのだ。

そこがまた冒険者の心を魅了してやまないんだけど。

興味や好奇心の赴くまま、あらゆるものを作った女神の子供たち。

恐らく女神の理ことわりに縛られていなかったのだから、魂があるうがなかるうが創り出せる力があった。そうして創られた生き物が、遺跡に蠢うごめくアレらだ。

かつて大陸を脅かした黒炎の厄災竜インサニアメトウスも、彼らが創り上げたものではないかと俺は考えている。

まさに厄災を体現したそれが、どんな形で遺跡の中で眠っていたのかはわからないが、偶然か、あるいは意図的にか、遺跡の外に出てきてしまった。

いずれにせよ、女神に近い者たちが作り上げたものなのだから、俺たちなんかの手に負えるわけがない。

そうとわかってはいても、まだ誰も知らないようなものが色々と隠されているんじゃないかと考えると、ゾクゾクする。早く冒険者になって、遺跡を巡る旅をしたいものだ。

ともかく、今回王都の森で見つかったインサニアメトウスの鱗は、多分俺が倒した竜のものじゃないかな。だってあんなものが何体もいるとは思いたくない。

漆黒だった鱗は半分色が抜けていたけど、あれは経年によるものだろう。百五十年経ってもなお、鱗だけで魔獣を異常に発生させるだけの力が残っているんだから、とんでもない代物だ。

それが、森の深淵で見つかって、謎の不審者がうろついていたとなれば、誰が考えたってこの二つの裏には何かあるって考える。

その裏に一体何が潜んでいるのか……

「サフィラス、何かよからぬことを考えていないか？」

お茶とお菓子を持つて戻ってきたパーシヴァルは、席に着くなり開口一番そう言った。

「嫌だなあ、よからぬことなんて考えていないよ」

今回のあれこれには誰かの思惑的な何かがあるんじゃないかな？ とは考えていたけど。

「そうか？ ならいいが。気になる気持ちはわかるが、竜の鱗と男の件は魔法師団や騎士団に任せた方がいい」

「大丈夫。一介の学院生が、おいそれと関わっていい案件じゃないってことぐらいわかっているって」俺は開いていた神話の本をパタンと閉じると、お茶に口をつける。

今の俺は無詠唱の大魔法使いフォルティスじゃなくて、ただのサフィラスだからね。俺が関わらなくて済むなら、それに越したことはない。

「これからは穏やかな学院生活を送るって決めてるんだ。もうすぐ到達度試験もあるし」

「そうだな。それに、サフィラスは芸術をもう少し頑張った方がいい」

「んぐっ……！」

思わずお茶を吹き出しそうになったけど、すんでのところで飲み込んだ。

最近何かと忙しくしていたので、例の図録は部屋の机の上で埃を被っている。正直、今さら覚えようとしても無理なので完全にはいらないものとして、意識的に視界に入れないようにしていた。

「……ちなみにさ、芸術の点が取れなかったりしたら、やっぱり追試だよね」

「ああ、及第点が取れるまでは追試だろう。もしそんなことになったら、図録を贈ってくれたブルームフィールド公爵は残念に思うだろうな」

「ああ、そうだよなあ……」

思わずテーブルに伏せる。公爵閣下をガツカリさせるのは不本意だけど、今回は全く自信がないんだよ。他の教科で頑張るから、芸術は免除してもらえないかな。

「でもさ、絵なんて自分がいいと思えば、誰がいつの時代に描いたものかなんて関係ないと思わないか……？ どんなに凄い巨匠が描いたって、興味がなければ難解な書物と一緒にだよ」

「そうだな、サフィラスの言う通りだ」

あっさりと同意を得られたので視線を上げれば、まるで幼い子供を見るような、慈愛に満ちた笑みを浮かべているパーシヴァルと目が合った。聞き分けのない子に言い聞かせる時の母親の顔だ。

えええ……これでも俺の出身はいい大人なんだぞ……

だけど、背中がむずむずはするけれど、悪い気はしないんだよな。これが赤髪だったら、間違いなくその顔面に拳を沈めてる。

「だが、追試を受けずに済むなら、それに越したことはないだろう？ 試験の後は長期休暇だ。い

つまでも追試を受けていたら、なかなか休暇に入れない」

「……うん、まあ。そうだよね」

穏やかに諭すパーシヴァルの笑みに芸術を忘れ、ほわんとした心持ちになって和んでいれば、緩んだ空気を霧散させる甲高い叫び声が突如として響いた。

「なんだ？」

俺は慌てて体を起こす。音の発生源は外のようなのだ。

カフテリアにいた学院生たちも、何事かと一斉に視線を外に向けていた。

窓の外を何か赤黒い大きな影が横切ると同時に、怒鳴り声と悲鳴が沸き上がる。

窓に駆け寄って外を見ると、十数匹のワイバーンが、獲物を狙うように上空でぐるぐると旋回していた。その下には、午後の時間を外で寛いでいた学院生が何人もいる。

「なんで、あんなものがここにいるんだ？」

本来ワイバーンはバルウム山の頂^{たて}辺りに生息していて、こんな低地に下りてはこない。

「サファイラス、それは後だ！ みんな！ 窓から離れて奥へ！」

パーシヴァルはカフテリアにいた学生に避難の指示を出すと、窓から外へと飛び出した。俺もすかさず後に続く。

学院に常駐している騎士が、外にいる学生を建物の中に避難するよう誘導しているが、貴族の彼らはワイバーンなんて見たことないから、恐怖で混乱状態になってしまつて避難の指示がまるで聞こえていない。

ついに、慌てて逃げようとしていたご令嬢が学舎とは反対方向に走り出し、足を縛^もらせて派手に転んだ。誰もが逃げ惑^{まど}つていて、ご令嬢を助け起こす者がいない。

「まずいな」

獲物が少ない山頂に住んでいるワイバーンは、確実に捕らえられる食糧を逃さない。案の定、転んだ令嬢を獲物と定めたのか、ワイバーンが急降下した。気がついた騎士が、令嬢に駆け寄ろうとしているけれど、あれでは間に合わない。

「た、助けてっ！」

俺は杖を抜くと、火球をワイバーンにぶつける。青白い高温の炎は、ワイバーンを一瞬で焼き消した。

燃やし尽くしてしまえば、後片付けが楽だろうからね。

ワイバーンには魔^ま毒^{どく}がないから食べようと思えば食べられるけれど、身が硬くて美味しくないのだ。飢えているならともかく、毎日美味しい肉が食べられるのにわざわざワイバーンの肉を残す必要はない。

「ここは俺たちに任せて、皆さんは学生の避難をお願いしますー！」

「すまない！」

騎士はご令嬢を抱きかかえると、素早く校舎に走った。

騒ぎを聞いて駆けつけてきたらしい高学年生が、ワイバーンを迎え撃っている。怯^ひむ様子もない彼らは、将来、騎士団や魔法師団を目指す学生たちだろう。小型のワイバーンは、そこそこの実力

があれば相手はできるから、加勢は必要なさそうだ。

そういえば、パーシヴァルは丸腰で飛び出して行ったけれど大丈夫かな？

さっと周囲を見渡すと、掃除用の箒でワイバーンを牽制し、魔法で攻撃しているパーシヴァルがいた。恐怖で動けなくなった学生を庇っているせいか、思うように動けていない。俺はすぐさまパーシヴァルの元に転移して、防壁魔法で周囲を固める。

「助かった、サフィラス」

「どういたしました。数はそれほどでもないから、一気に焼くよ」

上空を飛んでいるワイバーンに狙いを定め、ドカンドカんと火球を当ててゆく。飛び回るから厄介というだけで、奴らはそれほど強力な竜じゃない。この程度ならお茶を淹れている間に一掃できる。多少の燃え滓は落ちてくるけれど、大きな死体が残るよりはましだろう。

上空を飛び回っていたワイバーンのほぼ全てが煤となり、最後の一頭の首を学院生の一人が大きく跳躍してスパッと切り落とす。迷いのない、見事な剣筋だ。

わっと周囲から歓声上がる。剣についた血を払いながら振り向いたその人物は、よく見知った人だった。

「ディランさん！」

「やあ、サフィラスにパーシヴァル、お疲れさん。それにしても、話には聞いていたが、ワイバーンを一瞬で焼き消すなんてサフィラスの魔法は凄まじいな」

「ディランさんこそ！ 見事な剣の腕前じゃないですか！」

パーシヴァルの従兄弟だし、毎年剣術大会で優勝しているからそれなりの腕だとは思っていたけれど。ディランさんなら、今すぐに騎士団に入団したとしても即戦力になること請け合いた。

「麗しの魔法使い殿にお褒めいただけるとは光栄だな！ ……しかし、なんでこんなところにワイバーンが出たんだ？」

俺はパーシヴァルと顔を見合わせ、首を横に振る。

ワイバーンは竜だから、この間の魔獣発生と同じ原理で現れたものじゃないだろう。ならば、山にいるあいつらがなんで王都にいるんだって疑問が残る。

なんだかおかしいことが色々起きていて、間もなく到達度試験もあるし、一学院生である俺は、断じて首を突っ込まないぞ。

騎士たちが慌ただしく後処理を始めると、俺たちはカフェテリアに移動するように促される。カフェテリアに戻ると、みんな青い顔をして震えていた。泣いているご令嬢たちもいて、悲壮な空気が漂っている。

このままじゃ、しばらくは悪い夢に魘うなされそうだよな。

「我が友、ケット・シー」

ケット・シーが召喚陣から飛び出すと、くるんと空中で一回転して着地する。

「我がご主人、お呼びかにか？」

「うん。ケット・シーの可愛いところを披露して、ここにいるみんなを笑顔にしてくれないか？」

「承り！」

ケット・シーは紳士のような礼をすると、陽気な歌を歌いながら可愛らしいステップを踏む。

俺はさつと杖を振って、光の星屑と小さな花を宙に舞させた。突然に始まったケット・シーの踊りに、みんなが注目をする。

タタン、タタンと踊りながらご令嬢たちに近寄っていったケット・シーは、舞っている花を一輪取ると、恭しく差し出す。

「素敵なお嬢さん、こちらをどうぞなのにな」

「……まあ、私に？」

ついさつきまで震えて泣いていたご令嬢の涙は、すっかり止まっていた。やっぱり可愛いは無敵だな。ケット・シーも自分が可愛いことがわかっているのです、その武器を最大限利用して愛想を振りまいている。

ケット・シーの歌と踊りで、緊張と不安に満ちていたカフェテリアの空気が変わった。

ディランさんが感心したように、ヒュウと口笛を鳴らす。

「パーシー、お前、本当に凄い相棒を捕まえたよなあ」

「……ディラン、手伝ってくれ」

「了解、了解」

パーシヴァルはディランさんを伴ってカウンターに向かうと、料理人に何かを頼む。すぐにお茶が次から次へとカウンターに並べられ、二人はそれを受け取ると、一人一人に怪我はないか声を掛

けながら手渡していく。

ちよっぴり気障^{きざ}ったらしい雰囲気^{きふき}のディランさんに微笑まれて、ご令嬢にとどまらず、ご息までも頬を染めていた。

さつきまで勇敢に戦っていた騎士から丁寧にお茶なんか渡されたら、恐怖も忘れるってものだろう。さすが気遣いができる男は違う。

その後、今頃になって騒ぎを聞ききつけた赤髪がやってきて、俺もワイバーンを倒したかったと一頻り騒ぎ立てる場面もあったけれど、おおむねカフェテリアは落ち着きを取り戻したのだった。

それにしても、可愛いと麗しの騎士様の効果は絶大だなあ。

ワイバーン襲撃事件のせいで、学院内が少々落ち着かない。

またワイバーンが飛んでくるんじゃないかと、みんな外に出るのを控えている。確かに、原因がわからなければ不安だよな。

俺は、あの事件は明らかに誰かが引き起こしたものだと考えている。あんなふうに竜を集められるのは竜笛りゅうふえぐらいだ。

竜笛はその名の通り、竜を呼び寄せる笛だ。竜が仲間を呼ぶ高い声に似た音が出る。昔はパルウム山辺りで、この笛を使ったワイバーン狩りがよく行われていたけど、今でもやっているのかな？ だけど、竜笛を吹いたからって、パルウム山からここまでワイバーンが飛んでくるのには無理がある。

竜笛が聞こえるのは、せいぜい数キロメートルの範囲。だとすると、王都周辺にワイバーンを仕込んでいたと考えるのが妥当だ。

王都の周辺には森もあれば、山もある。比較的小型の竜であるワイバーンを運びこんで、ちよつと遠くまで響くような竜笛を使えば、学院にワイバーンを呼び寄せることはそう難しいことじゃなかっただろう。

もしもそうだったとして、問題は、その目的と一体誰がここで笛を吹いたかってことだ。今の学院の警護は以前に比べてしつかりしているの、不審者は容易に入り込めないはずなだけだ。

まあ、そんなことは俺なんかここで色々考えていてもしょうがない。騎士団や魔法師団の人たちが後始末やら調査やらにきているから、そのうちに真相は明らかになるだろう。

とにかく、学院は今そんな感じで、とてもではないがカフェテラスで落ち着いて勉強できるような雰囲気じゃない。

なので、本日はパーシヴァルの部屋にお邪魔している。

「そのテーブルを使ってくれ」

「うん。ありがとう」

パーシヴァルの部屋で、改めて芸術と向かい合う。俺とパーシヴァルしかいないのだから、集中するしかない。俺は至って真面目に、特に興味もない絵描きの人生を頭に叩き込む。

まだ大陸史の方が興味持てるよなあ。

渋々と図録を開き、目を滑らせながらもなんとか内容を読み込んでゆく。

「えーっと、この共同生活をして喧嘩別れしたロッホとローキャンって何主義だったっけ？」

個室用の小さなキッチンでお茶の準備をしているパーシヴァルに声をかける。

「ああ、印象主義だな。彼らについては、その後の頁で詳しく書かれていたと思うが……」

パーシヴァルはお茶を淹れていた手を止めると、わざわざ俺の側に来て本を捲ってくれた。レモネとミンタの爽やかな香りが、ふわりと鼻腔をくすぐる。

パーシヴァルは相変わらずいい匂いがするな。

俺はついつい側に立つパーシヴァルに鼻を寄せる。

死んだ奴を引き合いに出すのもよくないが、元婚約者だったギリアムはいつもどぎつい香水の匂いをさせていた。おかげで、今でもその匂いを嗅ぐと不愉快な気分になるんだ。

ギリアムに限らず、たまに廊下で香水をつけすぎている奴とすれ違うこともある。どつかの高級メゾンの香水なのかもしれないけど、あんなに節操なく匂いをつけていたら、品も何もあったもんじゃない。

匂いを振り撒いている本人は、鼻が馬鹿にならないんだろうか。いや、馬鹿になっているからこそ、浴びるように香水をつけているのかもしれないけど。

その点、パーシヴァルは自然に香るから、思わず深呼吸したくなる。森林にでもいる気分だな。

あー、ほんと爽やかでいい匂い……

「サ、サフィラス？」

「あ、ごめん。パーシヴァルって心地よい匂いがしてるから、つい……」

「……そ、そうか」

「うん。レモネとミンタのいい香り。爽やかで俺は凄く凄く好きだな」

素直な感想を伝えれば、パーシヴァルは何故か押し黙ってしまった。

「……パーシヴァル？ どうかした？」

「い、いや、なんでもない。俺はお茶を淹れてくるから、サフィラスはその頁から先を読んでいて

くれ」

「うん」

どうしたんだろう？ 俺、なんか変なことを言ったかな？

でも、いい匂いだって言っただけだし、気を悪くさせるようなことは言ってないよね？

☆ ☆ ☆

今日はパーシヴァル先生による芸術の授業はお休み。

彼には剣の鍛錬もあるので、毎日俺に付き合ってもらうわけにはいかない。昨日はなんだか様子がおかしかったから体調が悪いのかなと心配したけど、剣が振るえるなら大丈夫だろう。ちゃんと食事もしていたしね。

それにしてもパーシヴァルは剣術だけじゃなくて、芸術もその他の教科もそつなくこなすんだから、もう万能だ。全方位隙なしの男は全方位で努力を惜しまない男でもあった。

俺は左手を上げて、中指で光る指輪を眺める。

「……絆の証、か。んふふ」

自然と笑みが浮かんでしまう。パーシヴァルと一緒に冒険に出る日が楽しみだな。信頼できる仲間との旅は、困難すら楽しいものだ。

俺は足取り軽く第四寮棟の裏庭に向かった。芸術なんて一人じゃ勉強する気にもならないので、

今日は杖を回す練習に勤しむことにしたのだ。芸術以外の教科に関しては、試験前にサラッと流せば問題ない……多分ね。

実は、もう少し派手に杖を回そうと目論んでいるんだ。まだ技としては未完成だから、練習場所を選ぶだけだね。すっぽ抜けた杖が人に当たったりしたら大変だし、ましてや部屋なんかで杖を回して窓でも割ったら事だ。

第四寮棟の裏庭なら滅多に人は来ないし、杖をすっ飛ばしてスゴスゴと拾いに行く格好悪いところを誰かに見られなくて済む。

「……ん？　なんか落ちてる」

人気のない日陰の裏庭に、掌に乗るくらいの白いものが落ちていている。誰かの落とし物かと近づいてみたら、それは壊れた笛だった。

「これは……竜笛だな」

当然のことながら、あんな事件の後で竜笛なんか見つけたら普通に関連性を疑う。それに、騎士たちが学院内を見回っていたのに、今さらこんなところにあるのも怪しいじゃないか。

呪いでもかかっていたら嫌なので触らずにしゃがんで眺めていると、後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あいつです。あいつが竜笛を吹いたに違いありません。あの竜笛こそが揺るがぬ証拠です」

「はあ？」

おいおい、何を言っているんだ？

俺は呆れた顔で立ち上がって、振り返る。

そこには、数人の騎士を引き連れたウエリタスがいた。

「……一体なんの話だ？　俺は竜笛なんか吹いていないけど？」

「嘘を言うな。ならば、その足元に落ちているものはなんだ？」

「これは、ここに来たら既にあつたんだよ」

「それはどうだろうな？　それならば何故お前は、こんな人気のないところでコソコソとしているんだ？」

逆になんでウエリタスは俺がここにいることを知っているんだ？　しかも、ご丁寧に騎士まで引き連れてくるなんて、用意周到だな。

「どこで何をしようと俺の勝手では？」

「ほら見る。何をしているか言えないではないか。現に証拠もあるんだ。言い逃れはできないぞ」

ここで格好いい杖の回し方を練習するところでしたって言っても、信じてもらえるかどうか。それに、優雅に湖面に浮かぶ白鳥は、水面下で必死に水を掻いているところを、見ている者に悟らせないものだろうか？

「……悪いが、一緒に来てくれるだろうか」

神妙な顔の騎士に両脇を固められ、同行を促される。

「はあ、わかりました」

俺は渋々と頷いた。ここで抵抗してもあまり意味はないからな。

しかし、なんだか面倒臭いことになってきたぞ。格好いい杖回しは、まだ完璧には身につけていないから、練習しないと感覚を忘れちゃうんだけどなあ、今日は諦めるしかなさそうだ。

ウエリタスが得意げに、こいつは転移ができるからいくらでも裏工作ができるのだの、いつも第四寮棟の裏庭でゴソゴソと何かをしているのだのと、したり顔で話している。

なんだ？ ウエリタスの奴、隠れて俺のことを見張っていたのか？
だとしたら、それは気持ちが悪いな。

俺は学院の一室に連れて行かれて、教師立ち会いの元、三名の騎士から話を聞かれた。当然、俺は裏庭に落ちていた笛のことは知らないと答える。

さらに、一昨日はカフェテリアにいたので、その場にいた人たちに聞いてもらえれば、俺が笛を吹いていないことはわかるのでは？ と伝えた。

俺の話を聞いて、騎士の一人が部屋を出ていく。きつと確認を取りに行ってくれたのだろう。

まあ、あの場にいた人たちが証言してくれたとして、それを信じてもらえるかはわからないけどね。やっていないことの証明は証拠が残らないから、やったことを証明するよりも難しい。でも、やってないのだから、やってないと言っただけでさ。

確認に向かった騎士が戻ってくるまでの間、夕食までに解放してくれるのかな、とか、騎士団の留置所に連れて行かれたら、美術図録でも差し入れてもらおうかな、とか、そんなことをぼんやりと考える。

「安心したまえ、サフィラス君。我々は君が笛を吹いたとは思っていないよ」

三人の騎士の中で一番偉そうな人がそう言った。

「……え、そうなんですか？」

そういえば、騎士たちの雰囲気はこれから取り調べを行うには随分と和やかだ。

「ああ、これはあくまでも彼を納得させるための形式的なものだ。何しろ彼は魔法師団相談役のご息だから、ないがしろにはできなくてね」

「ブルームフィールド公爵家の後ろ盾を得ているサフィラス君が、そんな迂闊なことをするとはいえない。それに、君のことは第二騎士団の連中から聞いているよ。我々の仲間を助けてくれたそうじゃないか」

なんだ、そうだったのか。最初から俺を疑っていたわけじゃないんだ。騎士だって暇じゃないのに、本当に元兄のせいで申し訳ないな。

特に取り調べを受けるでもなく、他愛のない雑談をしていたら、さつき出ていった騎士が戻ってきた。

「彼の主張は間違いありませんでした。ワイバーンの襲撃がある前から、カフェテリアにいたそうです。多くの学院生が証言してくれました」

「そうか。これで彼も納得してくれるだろう。サフィラス君、時間を取って悪かったね。もう帰ってもらって結構だよ」

「そうですか。では」

席を立てて部屋を出ると、外でウエリタスが待ち構えていた。俺の顔を見るなり口の端を引き上げ、底意地の悪そうな笑みを浮かべる。

俺は彼に何かしたかな？ むしろ俺がされていた方だと思うけど。

「こいつは今後どのように？」

今や他人な上に全く親しくもないのに、こいつ呼ばわりするとは。貴族子息にあるまじき無礼さだ。何より俺を犯人と決めつけているのが気に入らない。

「彼はあの笛とは無関係でしたよ」

「……は？ そんなはずはない！ こいつ以外に竜笛を吹ける奴はいないはずですよ！」

「……逆に聞くが、何故彼が竜笛を吹いたと思うのだね？」

「あんな人気のないところにいるなんて不自然だ！ 事実、これは笛を持っていたではないですか！」

こいつがどうとう、これになった。そういえば伯爵家にいた頃はそう呼ばれていたっけ。

それにしても、怪しい……

ここまで必死に俺を犯人にしようとするなんて、もしか、ワイバーンの一件に伯爵やウエリタスが関わっているなんてことはないだろうな。まさか、俺を陥れるためだけに、あれだけ大掛かりなことをするわけ……いや、するかもしれない。

「いや、持っていないけど。落ちていたものを眺めていただけじゃん」

俺が言い返せば、ウエリタスにぎろりと睨まれた。

だから、なんでそんなに敵意を向けられなきゃならないの？ 解せぬ。

大体、俺を犯人だとする証拠がそれだけだなんて、根拠としては弱すぎるだろう。だけど、もし騎士団が相談役側の人間だったら、それだけでも俺を拘束するに十分な理由となっていたかもしれない。伯爵の人望のなさが幸いしたな。

「サフィラス君に怪しいところはなかった。あの日、カフェテリアにいた多くの学院生たちが証言してくれたよ。彼らの証言に不自然なところは一つもなかったが？」

「ならば、こいつの部屋を調べてください。他に証拠となるものが出てくるはずですよ」

おや？ やけに自身ありげだな。もしかして、第四寮棟の不用心に付け込んで、俺の部屋に何か仕込もうとしているのかな？

だが、残念。最近はそのそこ高価な私物を持つ身になったので、俺もそれなりに警戒しているんだ。そう簡単に侵入は許さないぞ。

部屋を空けている間は、大食漢のクロウラーイモムシに留守番をお願いしている。見た目はちょっとアレだけど、なんでも好き嫌いなく食べてくれるいい子だ。俺の部屋で悪さをしようとしている共犯者がいるなら、今頃悲鳴を上げて逃げ出しているだろうな。

「わざわざワイバーンを呼び寄せて、学院を混乱させなければならぬ理由が俺にはありませんか？」

「ふん、この間は随分と活躍したそうじゃないか。自作自演で自分の評価を上げたかったのではないか？」

お前じゃあるまいし、そんなことするか。

「サフィラス！」

「パーシヴァル？」

パーシヴァルが足早にこちらにやってくる。よほど急いだきたのだろう、鍛錬着のまま、汗も拭いていないのか、金色の髪が額に張り付いている。

「大丈夫か!? 騎士団に連れて行かれたと聞いた」

「うん、大丈夫だよ。童笛を吹いた疑いがかかっていたんだけど、カフェテリアにいたみんなが証言してくれたって」

「それならば、俺も証言しよう。あの日は午後の授業が終わった後、サフィラスとずっと一緒だった。彼に童笛など吹けるはずがない」

「ふん、ベリサリオがお前といい仲であることは誰もが知っている。そんな人物の証言が当てになるとしても？ 大方、その顔と体で籠絡したんだろうがな。探せばお前に誑かされた奴は他にもいるんじゃないか？ 学院を辞めることになったら、そっちの道に進んだらどうだ？ お前にはお似合いだろう」

「はあ？」

今の下品な発言を、パーシヴァルではなく俺に向けて言い放ったのは正解だ。三男とはいえ、パーシヴァルは辺境伯家のご子息だからな。

だからといって、今はなんの関わりもない俺に言っくいわけがないけど。いい加減にしないと、

公爵家から抗議の書状が届くぞ。

「ペルフエクティオ先輩、それは一体どういう意味でしょうか？」

「そのままの意味だが？ 他に何があると？」

パーシヴァルが問いかければ、ウエリタスが鼻で笑う。

その瞬間、ざっと、パーシヴァルの纏う雰囲気が変わった。ちらりと横に立つ彼の顔を窺えば、その表情は無だった。

うわ……これは相当怒ってるんじゃないか？ 気配はもの凄く怒っているのに、顔が無表情って何とも器用だな。

でも、怒って当然だよ。肉欲に惑わされて証言するような奴だと言われているんだから、失礼極まりない。

俺のことは好きに言えばいいさ。だけど、パーシヴァルは高潔な男だ。その彼を侮辱するような発言は看過できるものじゃない。

決別した家族ではあるが、本意ながらも血の繋がっている兄弟。手柄横取りの件は黙っておいてやろうと思ったが、気が変わった。そもそも、やらねばなしは俺の性分じゃない。

やってないことの証明は難しいが、やったことの証明は案外簡単なんだよ。

「やれやれ、手柄の横取りの次は濡れ衣か。挙句、下品な言葉で人を貶めるなんて、伯爵家の嫡男とあるうものが、呆れたもんだな」

「なんだと？」

いかにも呆れたとばかりに言い放つてやれば、ウエリタスが再び俺を睨む。いくら睨んだところで、ウエリタスの睨みなんて魔鼠まその威嚇にも及びやしない。

「王都の魔獣を討伐したって話、あれはお前じゃないじゃん」

「……何を根拠にそんなことを。馬鹿馬鹿しい」

「根拠ならあるよ。だって、あれをやったの俺だもん」

「はっ！ 何を言い出すかと思えば……」

一瞬焦りを浮かべかけたウエリタスだけど、討伐したのは俺だと言えば、途端に優越と侮蔑の混じった表情を浮かべた。

俺にそんなことはできないと思っっているんだろう。そろそろ俺に対する認識を改めた方がいいと思うけど。俺を無能のままにしておきたいんだろうが、いつまでも言われっぱなしで黙っていると思っなよ。

「確か、魔獣を討伐した者は黒いマントを纏い、二つ首の黒い獣に乗って、黒い杖を振るっていた、だっけか」

俺は杖を抜くと同時に召喚陣を描く。

「おいで、オルトロス」

召喚陣から咆哮を上げながらオルトロスが現れる。突然出現した凶暴そうな幻獣に、さしもの騎士たちも驚いて咄嗟に剣の柄に手を伸ばす。

「剣を抜かないでください。あれは彼の召喚獣です。むやみに暴れたりはしません」

俺の代わりにパーシヴァルが、オルトロスが危険な獣ではないことを騎士たちに伝えてくれた。

恐ろしいげな登場こそしたけれど、オルトロスはすぐに大人しく伏せて俺の側に控える。

うんうん、今は暴れる場ではないってことを、ちゃんとかわかってるいい子なんだよ。

「……で、これ。黒い杖、ね」

ウエリタスを挑発するようにトライコーンの杖を振ってみせれば、杖の先から金の光がキラキラと迸るほととぎすものだから、騎士の皆さんがちょっと驚いている。

「あと、黒いマントは部屋にある」

「そんなものは何一つ証拠にはならないだろう。夜の闇の中の討伐だったんだ。はっきりと討伐者の姿を見た者はいない。二つ首の獣だって、馬を二頭連れていけばそう見えることもある。その程度のもので自分が討伐したと主張するのか？ どこまでも卑しい奴め」

「その言葉、そっくりそのままお前に返すよ。証拠はこれだけじゃない。魔獣まじゅうの骸せがれは焼いて処分されていたはずだけど……」

「そうだ。骸はみんな焼かれて残っていない。どうやってお前が討伐したと証明するつもりなんだ？」
ウエリタスは俺に証明する手段がないと思っっている。だからこそ、誰が討伐していたとしても手柄を横取りできると考えたんだろうが、詰めが甘い。

確かにペルフェクティオにはかつての英雄譚があるから、ウエリタスが魔獣を倒したと言えば多くの人がさもありませんと思っただろう。

そもそも、その英雄譚自体が嘘っぱちなんだけどな。

「証明ならできるよ。俺は素材が欲しくて、魔獣を狩っていたんだ。手に入れた素材を王都の素材屋で売ろうとしたんだけど、あまりにも量が多かったせいで盗難を疑われちゃってさ。王都では買収してもらえなかったんだよね。で、仕方がないからヴァンダーウォールの素材屋まで売りに行ったのさ。何しろ俺は転移ができるから、オリエンズと王都を行き来するくらいなんともないだろう。」

転移を強調すると、ウエリタスは何か感じるものがあつたのか、僅かに表情を翳らせた。でも、俺の転移を言い出したのはお前の方だ。

「……またヴァンダーウォールか……口裏などいくらでも合わせられるだろう。件の地はお前と随分懇意にしている。王国の剣と盾と言われていても、お前のような奴に肩入れするのだから。実に愚かなことだ」

パーシヴァルがピクリと肩を揺らしたので、その腕をポンポンと叩く。

確かに憎たらしい顔をしていて不愉快極まりないが、わざわざパーシヴァルが相手をするほどの価値はない。ここは俺に任せておいてくれ。

それにしても、多少は頭がいいのかと思っていたウエリタスだが、ここまで愚かだとは思わなかった。この国におけるヴァンダーウォールの重要さを全くわかっていない。

しかも、ベリサリオ家はベルフェクティオと違って家族の結束が強いんだ。これまでのパーシヴァルに対する不敬な発言がヴァンダーウォール卿や夫人の耳に入ったら大変なことになるんだけどな。伯爵家はそこそこの貴族なのに、そんなことも知らないとは。呆れるほど三流貴族だ。

「当然わかっているとは思うけど、領民はその土地の領主に税を納めてる。そして、領主は領民か

ら預かった税を国に納める」

「それがなんだと言うんだ？」

やれやれ。そこに思い至れないから軽慮浅謀な手柄の横取りなんか思いついたんだろう。先祖は厄災童のどさくさに紛れて上手くやったから、今に至るまでバレルことはなかったみたいだけど。

「だからさ、まともな商人だったら何をどれだけ仕入れて、いくらで売ったかを帳簿に記入してると話だよ。税を納める時に必要だろ。俺は何度もオリエンズの素材屋に素材を売りに行っているんだ。最後にはちよつと買値を上乗せしてくれるくらいには、顔見知りになっている。それほど昔のことでもないから、その素材屋を訪ねて帳簿を見せてもらえば、王都で魔獣が暴れていた時期に俺が素材を持ち込んでいたってわかるんじゃないかな？ 店に後ろめたいことがなければ、帳簿を見せてくれると思うよ」

淡々と説明すると、だんだんウエリタスの顔色が悪くなってきたが、俺は構わず続ける。

「それでも証拠が足りないって言うなら、魔獣を討伐した場所を一箇所ずつ回ってもいいけど？ 骸を焼いた痕跡は残っていたはずだから、そこは第二騎士団が把握しているだろうし。俺はどこで何を狩ったか覚えてるよ。お前も魔獣を討伐したと言うなら、自分がどの辺りで仕事をしたのかもちろん覚えてるだろう？」

「そ、それは……」

言えるはずがないよな。討伐なんてしてないんだから。さあウエリタス、どう反論する？

「そういうことでしたら、サフィラス様の支援をしておりますブルームフィールド公爵家が、責任

を持つてその裏付けを取つて参りますわ」

張りつめた空気を切り裂くような、凜とした声が響く。

気がつけば、周囲には随分人が集まつていた。オルトロスを召喚して、意図せず廊下を塞いでしまったからだ。この状況を気にせず、ここを通ろうという者は相当の猛者と言えよう。

俺のせいで滞つてしまった人波がさつと割れて、アウローラ嬢が現れた。

これは思わぬ援軍の登場だ。

「スタインフェルド嬢……」

「サフィラス様にあらぬ疑いをかけられた上に、その功績までも奪われたとなれば、それは我が公爵家が侮られたと同義ではありませんか。そのようなこと、当家としては黙つてはおられません。

もちろん、オールドリッジ伯爵家の名誉もかかっていることです。双方に公平であるよう、国王陛下より立会人として中央神殿より神官を指名していただきますよう」

アウローラの言葉に周囲がざわつく。

そりゃそうだ。信仰の要である中央神殿から神官を呼んだら、ただ事じゃ済まなくなる。

ウエリタスはすっかり顔色をなくしていた。俺を陥れようとしたはずなのに、まさか自分が吊し上げられることになると思つてもみなかったんだらう。

だから余計なことと言わない方がよかつたのに。

「……アウローラ様があそこまでおっしゃるといふことは、王都の魔獣を討伐したのは本当にペルフェクテイオ様じゃなかつたつてことなの？」

「いや、まさか……だつて、ペルフェクテイオ家といえは、かつての英雄だろ？」

「でも、王都周辺を警護している第二騎士団の皆様が、魔獣を討伐された方は他にいらつしやるつて言っているつて聞いたわ……」

ざわつき出した学院生たちの疑惑の目が、ウエリタスに向けられる。

プライドの高いウエリタスに、この状況は耐えられないだらう。だけど、俺はこの程度では終わらせるつもりはない。

「……それからさあ、執拗に俺が童笛を吹いたことにしたがってるけど、もしかして童笛を吹いたのつて、本当はウエリタスじゃないのか？ 何しろ、お前は俺のことを目の敵にしているもんな。

俺を陥れるために、わざと学院で騒ぎを起こしたんじゃない？」

「違う！ 俺は童笛など吹いていない！」

「ふーん？ なら、ワイバーン騒ぎの時、お前はどこにいたの？」

「寮にいた！」

「それを証明してくれる人は？」

「っ！ それは……寮監に聞いてもらえれば、俺が部屋にいたことはわかるはずだ」

「でも、寮に入った後に、こつそり外に出ることだつて、できなくはないよね」

笛を吹いたかどうかはともかく、少なくとも俺を陥れようとしていたのは間違いない。本当にウエリタスが何もしていないとしても、証言を後押ししてくれる人がいなければ、ウエリタスを疑う者は出てくるだらう。その真偽が明らかになる前に、きつとこの話は学院中に広まるだらうな。

ロウラーは見た目がちよつと不気味なだけで、綺麗な緑色だし、触れれば天鵞絨ビロードのように滑らかで、抱き締めれば適度な弾力があってなかなか気持ちいい。野営の時に添い寝をしてもらえば、心地よい眠りに誘いざなってくれる。

しかも、好き嫌いなくなんでも食べてくれるから、不要なものを処分したいときはクロウラーにお願いすれば、それはもうすっかり綺麗に跡形もなく片付いてしまうのだ。そんな素敵なクロウラーを怖がらなくてもいいのに。

まあ、勝手に俺の部屋に侵入しておきながらも、手足は食われなかったんだ。失禁程度で済んでよかつたんじゃないか？

☆ ☆ ☆

「え？ 俺に面会？ オルドリッジ伯爵夫人が？」

ウエリタスの件があつてから、数日後。

ワイバーン襲撃に引き続き、学院内はちよつとばかりざわざわしていたけれど、芸術に関すること以外はおおむね穏やかな日常を送っていた俺に、オルドリッジ伯爵夫人が面会に来た。

突然やつてくるなんて、一体なんだ？

そもそも、公爵家のお茶会で会つて以来全く関わりがなかったのに、なんの先触れもなく俺に会いにくる真意がわからない。

わからないが、気になるのでとりあえずは会つてみることにした。

指定されたサロンに向かうと、どこか窶やれた雰囲気の元母親が、座りもせず俺のことを待っていた。

「……お久しぶりです。オルドリッジ伯爵夫人」

「あなた！ どうしてウエリタスをあんなに追い詰めたりの!?」

オルドリッジ伯爵夫人は、俺の顔を見るなり開口一番にそう言い放った。

はい？ 一体なんのことかな？

わけがわからずポカンとしている俺に、夫人は半泣きになりながら捲し立てる。

「あなたのせいで、ウエリタスはすっかり立場をなくしてしまったのよ！」

「えーっと、申し訳ないんですけど。言っている意味がちよつともわからないんですが？」

「わからないはずはないでしょう！ あなたのせいで、ウエリタスは学院で恥をかいたのよ！ その上、旦那様に酷く叱責されて……かわいそうに……今の子にはどこにも居場所がないわっ……!!」

ああ、先日の暴露事件のことか。

俺とウエリタスの応酬を見ていた学院生はかなり多かつたからな。

そのせいで、王都の魔獣討伐が実はウエリタスじゃなかつたとか、竜笛を吹いたのはウエリタスだつたんじゃないかとか、そんな真実と噂が学院内に流れた。

「それはあいつの自業自得でしょう。俺は何も悪くありませんが？」

「な、なんてことを……しかも、実の兄に対してあいつだなんて……」

いやいや、伯爵家の面々は俺のことをあれ呼ばわりしていた。俺へのあれはよくて、ウエリタスへのあいつが駄目ってどういう理屈だ？

「一体何をおっしゃるやら。あなた方は、俺のことをあれ呼ばわりしていたじゃないですか。俺に対するあれはまかり通って、ウエリタスに対するあいつが駄目な理由が皆目わかりませんが。それに、ウエリタスは俺の兄じゃない。すっかりお忘れのようですが、俺は既にペルフエクテイオ家の人間じゃないんですよ？ それに、王都で魔獣を狩ったのはウエリタスではなく俺だ。それをさも自分の手柄のように吹聴していたのですから、むしろ被害者は俺だと思えますけど」

「……そうだとしても、何もあの子の居場所まで奪わなくてもよかつたのに……」
なるほどね。改めて理解した。

五歳で神殿から魔力がないと判定された時から、この人にとって俺は息子でもなんでもなくなつたんだろう。自分の立場を脅かす邪魔者。それどころか今や、俺は大切な長男を陥れた悪人だ。

公爵家でのお茶会では戻ってこいとさえ言っていたのにな。全く自分勝手な人だ。

……ほんと、気分が悪い。

「俺は生きる場所すら奪われていましたけどね。そもそも、もともと俺の方は黙っててやつたんですよ。わざわざひけらかすような手柄でもない。なのに、あいつは卑しい言葉で俺の仲間を侮辱し、あまつさえ俺を学院で起きた騒動の犯人にまで仕立て上げようとした。あなたは俺を責めるよりも、他人を陥れようとしたウエリタスを、母親として諫めなければならぬのでは？」

「そ、そんな……だつて、あの子は伯爵家の嫡男なのに……」

だからなんだつて言うんだ。そんなこと、俺には関係ない。曲がりなりにも伯爵家の嫡男だというなら、もつとまともに育てるべきだ。

つい好奇心で会ってしまったけれど、こんな話なら会うんじゃないやなかつた。

「これ以上、話すことはありません。それでは、失礼します」

「あ……」

俺はさつさとサロンを後にする。

あの人は一度も俺の名前を呼ばなかつた。もしかしたら、俺の名前すら忘れてしまったのかも知れない。まあ、それならそれで構わないけど。もう、俺とは関係のない他人だからな。

「……俺を産んだというだけで、母親ではなかつたってことだ」

今、この胸の奥で燻っている痛みや切なさ、サフィラスのものだ。

前世の記憶を思い出したからといって、不遇な幼少期を送っていた『僕』がいなくなってしまうわけじゃない。伯爵家にいた時に感じていた悲しみや諦念は、今もちゃんと俺の中にある。きつとこの想いは、どれだけ時間が経とうと消えはしないだろう。

フォルティスだつた前世を思い出さなかつたら、サフィラスは元家族や元婚約者に搾取され続けて、今頃は心が壊れていたかもしれない。

壊れる前に、貞操の危機に遭って寮の窓から飛び降りちゃつたけどな。下手すりゃ、命を落としていた。とはいえ、その飛び降りの一件がなければ、俺を思い出さなかつたわけだから、なんとも複雑なところだ。

フォルティスは早くに家を出たけれど、確かに父や母、兄たちに愛されていた。それに俺は大人だから多少の理不尽は飲み込めるし、飲み込めなけりゃ、容赦なくぶっ飛ばしもする。

だけど、俺が平気な顔をしているからといって、何も思うところがないわけじゃない。大体、あの伯爵家の連中はどこまでサフィラスを蔑ろにしたら気が済むんだ。家族の輪から弾き出したのなら、一切構わずに放っておいてくれればいいものを。自分たちの都合が悪くなるたびに、俺を攻撃してくる。

本当に胸糞が悪いな。

「あ、サフィラスさん、ちょうどよかった。サフィラスさんにお荷物が届いておりますよ」

むしゃくしゃする気持ちを振り払いたくて、壁でも殴りつけようかと思っていたところで、学院の事務員さんに声をかけられた。

壁を殴っているところを見られでもしたら、叱られるところだった。危ない、危ない。

「荷物ですか？」

「はい。ヴァンダーウォール辺境伯夫人からです」

事務員さんから受け取った箱は、思ったよりも軽い。

部屋に戻って早速箱を開けてみたら、中には手紙と、薄紙に包まれた肌触りのいい木綿の下着が何枚か入っていた。

「……わあ、これはなかなか高級そうな下着だ」

伯爵家から持ってきた、安物のごわついた下着とは大違いだな。

手紙を開くと、その内容は俺の体調と生活を気遣うものだった。

怪我や病気をしていないか。しっかりと食べているか。試験の勉強は進んでいるのか。儉約の姿勢は悪いことではないが、必要なものは惜しまず買うようにとか。お金が足りなければ遠慮せずに辺境伯家に連絡するようとか。

まるで本当の母親からの手紙のようで、思わず笑ってしまった。

アデライン夫人は懐の深いお人だ。

フォルティスの母親はアデライン夫人のようにとびきりの美人ではなかったけれど、よその家の子供も自分の子供のように見守る面倒見のいい母だった。肝が据わっているところとか、二人はなんだか似てるどころがある。

気持ちのこもった届け物のおかげで、俺はすっかりいつもの調子を取り戻した。

伯爵夫人あの人は、血が繋がっているだけのただの他人だ。俺には、血が繋がっていなくても、心配してくれる人がいる。

血は水よりも濃いかもしいれないが、それが絆になるとは限らない。

☆ ☆ ☆

「パーシヴァル。昨日アデライン夫人から荷物が届いたよ！」

「ああ、俺のところにも届いていたから、きっとサフィラスのところにも届いているだろうと思っ

ていた」

「なんだか気を遣ってもらっちゃって、申し訳ないな」

手紙には、お返しは気にしなくていい、その代わりヨール祭の長期休暇には必ずヴァンダーウォールに戻ってくるようにと念押ししてあった。

もちろんヨール祭には行くつもりだけど、その時には何か王都土産を見繕って持ってゆこう。

「サフィラスはヴァンダーウォールを故郷だと言ってくれただろう？ ならば、ベリサリ才家はサフィラスの実家だ。遠慮することは何もない」

「……そっか、実家か、」

なんだかこそばゆいな。となると、アデライン夫人は俺にとって辺境の母ってことか。そして、同じ仕立ての下着を身につけるパーシヴァルと俺は。

「……下着兄弟ということだな……」

「？」

思わず零れた俺の独り言に、パーシヴァルは首を傾げる。

いけない、いけない。こういうくだらないことばかり言っていたから、ウルラに呆れられていたんだよな。

「そういえば、そろそろクラウイスたちが学院に戻ってくるらしいな」

「あ、そうそう！ 俺もアウローラ嬢に聞いたよ」

「向こうもだいぶ落ち着いたようだから、同盟についても本格的に動き始めるだろう」

「うん、内乱の一件から止まっちゃっていたから、早く締結されるといいんだけどね」

ワーズテイターズ国内はだいぶごたついていたから、同盟の話はもっと先になるかと思っていたけど、ベネディクト陛下とクラウイスたちが頑張ったんだろう。

同盟を結んだ後に、またあんな内乱が起きたら人族と獣人族の関係修復は相当困難なものになる。そうはならないように、国内政治の安定に尽力していたはずだ。

もちろん我が国の王太子殿下も水面下で頑張っていたと思う。

大陸一の王国と獣人族唯一の王国の二国間で同盟が結ばれば、人や物の行き来が頻繁になる。もちろん、これまでだって全くなかったわけじゃないけど。それがもっと大規模になって、軍事的な面でも互いに協力できるようになるから、地域の安定にも繋がるし、いいことだよな。ところで。

ワーズテイターズでは俺の召喚獣たちが各地で銅像になっっているらしい。なんでも、見守りの獣として、広場や神殿に置かれているとか。

向こうに預けている間に、彼らは十分活躍してくれたみたいで、獣人たちの人気を得たようだ。顔は強面だけど、みんな気は優しいから、見慣れてしまえばちょっと個人的な姿も愛らしく見えてくる。そんな彼らのよさを理解してもらえたと思うと、俺はとても嬉しい。

その銅像とやらをそのうち見に行かなきゃね。

「元気でやっているって聞いてはいるけど……早く二人に会いたいなあ」

「戻ってくるなら、第二学年に上がる頃だろうな」

「戻ってきたら四人で城下に遊びに行こうよ」

「ああ、それはいいな。きつと彼らも喜ぶ」

前回こつちにきた時は、ラエトウスを楽しむ余裕もなかっただろう。なんなら、もつと色々なところを案内してあげよう。俺の転移があれば、どんなに遠くたって日帰りできる。

獣人に対する理解も以前よりは広がって、学院内もだいぶ過ごしやすくなっていると思う。今度こそ、彼らと楽しい学院生活を送りたいよ。

第二章

風の噂で、ウエリタスが学院にいないことを知った。

どうやらこの間の一件で学院にしばらくなくなって、実家で引き籠っているらしい。実家に逃げたとしても、そこでも肩身が狭い思いはしているだろうけど。自業自得だとしか言いようがないので、特に思うところはない。

伯爵家では伯爵が絶対権力であったのは確かだけれど、父親の影響が少ない学院での振る舞い方を変えれば、少なくとも居場所を失うことはなかったはずだ。多少でも周囲の声に耳を傾けられれば、伯爵の外での評判がよくなることだってわかったはずだしね。

伯爵夫人はちよつと魔力が高い子爵家に生まれたただで、オールドリッジ伯爵家に嫁ぐことになった、ある意味被害者だと思う。魔力の高い子供を産む、ただそれだけの存在として望まれたのに、魔力なしの子供を産んでしまつて肩身も狭かつただろうさ。

そんな夫人の立場を悪くした俺が、心の拠り所である優秀(?)な嫡男の邪魔をしたんだから、文句の一つも言いたくなつたんだろう。

だからと言って、いい大人が子供に文句を言いに来るのはいかなものかとは思うけど。大体あんなことを言いに来て、俺にどうしてほしかつたんだろう。俺が悪かつたとしても言わせたかつたの

立ち読みサンプル はここまで

か。たとえそうだとしても、そんなこと絶対に言つてやらないけど。

あんな一家の中にあつて、公爵家のお茶会で俺に頭を下げたアクイラは、伯爵家唯一の良心かもしれない。学園に入学したら、できれば実家とは距離をおいた方がいいと思う。このまま伯爵家と繋がつていてもいいことは一つもない。沈む未来が確実な泥舟だからね。

どうするかは本人次第だけど、学院に入学してきたらそれとなく話を聞いてみるか。

そんなあれこれも含め、相も変わらず色々ありすぎて、なかなか平穏な学院生活を送れないまま、俺は到達度試験を乗り切つた。学生らしい生活を送っているなんて言つたのは一体誰だ？

今日はその結果が張り出される。外国語、算術、歴史はあまり心配していない。魔法に関しては向かうところ敵なしだ。唯一にして最大の弱点である芸術だが、パーシヴァルの援護も虚しく、その成果を発揮できたとは到底言えなかつた。本当に、ごめん。

どうやら俺の頭は芸術を受け入れるつもりが全くないらしい。生きてゆく上であまり必要と感ぜない、というのもある。

芸術を否定するつもりはないけれど、押し付けられてもうんざりするだけなんだよね。今後、学院に平民を受け入れるなら、芸術は試験の対象から外すべきだと強く主張するぞ。

芸術の試験結果という不安の種を抱えてはいるけれど、あとは長期休暇を待つばかり。年越しとヨール祭がある冬の休暇は、貴族も平民も関係なく特別な期間だ。

一年の感謝と新たな年を祝うヨール。

年末から年が明けるまでの数日間にわたつて、盛大にお祝いをする。歌つて踊つて、ご馳走を食べて盛り上がるヨール祭を、大人も子供も楽しみにしてるんだ。寒くて辛い冬も、このヨールがあるから乗り切れると言つても過言じゃない。

貴族家は大きなパーティを開いたりもするらしいけど。平民だと、大体家族や親しい人たちで祝うか、あとは街に繰り出して盛り上がるのが定番。

前世の俺は、ひたすら飲んで食べて仲間と連日大騒ぎをしていた。ヨールの間は冒険もお休み。バイロンは底の抜けた樽のように酒を飲みまくつていて、このヨール祭のために一年稼いでいるようなものだった。

この時ばかりは、ウルラもエヴァンも、飲みすぎだとバイロンに小言を言つたりはしない。固いことは言いつこなしで、本当に楽しかつた。

色々な土地で新年を迎えたけれど、ヴァンダーウォールで迎える新年は初めてだ。

気分はとつくに長期休暇で、少しわくわくしながら成績が張り出されている掲示板まで行くと、既に人が集まつていて成績表を見上げながら一喜一憂していた。

「おお、相変わらず、凄いな……」

一位はやつぱりアウローラ。誰にも首位を譲らない勢いだ。そして、次点はなんとパーシヴァル。前回二位でイキがつていたなんとかオールビーと言うやつの名前を探したが、十位を過ぎても見つからず、それよりも先に俺の名前が見つかつた。

今回も安定の二十位以内。芸術はというと、あと一点取れなければ追試というすれすれで踏みと